様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４７２０１１３

研究課題名（和文）板本に基づいて製作された奈良絵本の総合的研究

研究課題名（英文）A study of "Nara-Ehon"(Illustrated Books) based on "Hanpon"(Printed Books).

研究代表者
田村　隆（TAMURA, Takashi）

東京大学・総合文化研究科・准教授

研究者番号：７０４３２８９６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：　奈良絵本と板本の関係は、一般に奈良絵本に基づいて板本が製作されたと考えられることが多いが、本研究では逆に「板本に基づいて製作された奈良絵本」という見方に立って、『伊勢物語』、『竹取物語』、『源氏物語』などの奈良絵本・絵巻および物語本文の考察を進めた。『伊勢物語』については初段の挿絵二図に描かれた紅葉・桜に着目し、初段の絵を二段の絵と誤解するに至る経緯を考察した。『竹取物語』については東京大学文学部国文学研究室所蔵の『竹取物語絵巻』の本文系統や挿絵の特徴について明らかにした。『源氏物語』については室町期から江戸期にかけての諸本の本文を検討し、奈良絵本の時代に用いられた本文の生成過程を考えた。

研究成果の概要（英文）：This is a study of "Nara-Ehon"(Illustrated Books or Scrolls) based on "Hanpon"(Printed Books).I dealed with mainly "The Tales of Ise","The Tale of Taketori" and "The Tale of Genji". About "The Tales of Ise", the making process of two illustrations in "Nara-Ehon" and "Hanpon" became clear. About "The Tale of Taketori", I surveyed about the rare "Nara Ehon"(picture scroll) in the collection of The University of Tokyo. About "The Tale of Genji", I studied the characteristics of the texts in Muromachi and Edo period.

研究分野：日本古典文学

キーワード：奈良絵本　板本　伊勢物語　源氏物語　竹取物語　挿絵

１．研究開始当初の背景

奈良絵本（奈良絵巻）とは奈良絵を伴う絵本および絵巻のことで、主に江戸時代前期に多く製作された。『源氏物語』や『うつほ物語』といった平安朝物語の奈良絵本や、『文正草子』、『鉢かづき』、『酒呑童子』といった室町時代の御伽草子の奈良絵本が知られる。奈良絵本を考える枠組みとしては、従来は

奈良絵本　→　板本

という製作順序が考えられてきた。これは出版されて大量に流布する板本よりも、一冊ずつ書き写される写本の方が古いという通念によるものなのであろう。たしかに、通常の写本と板本の関係では写本が先に成立した場合が多い。この通念に基づいて、安倍素子「奈良絵本絵巻『うつほ物語』について（二）―万治版への影響―」『尚絅大学研究紀要』（29、平成 18 年 2 月）などの論考では『うつほ物語』に関して奈良絵本から板本が製作されたとの枠組みを主張し、また徳田進『竹取物語絵巻の系譜的研究』（桜楓社、昭和 53 年）においても、『竹取物語』について、「通行本挿絵入り竹取物語（注：板本を指す）は九大蔵竹取物語絵巻（注：奈良絵本を指す）乃至この系統のものの影響下に成り」のごとく、奈良絵本から板本へとの枠組みが当然のように示される。

しかし、申請者は先に平成 20-22 年度の科学研究費補助金若手研究（B）「『うつほ物語』享受史における奈良絵本と板本の影響関係についての調査研究」（研究代表者：申請者）の成果により、調査した奈良絵本の『うつほ物語』はすべて同時代の板本（刊行された本）に基づくものであることが明らかにした。その研究成果によって少なくとも『うつほ物語』については、

板本　→　奈良絵本

という成立順序であることが明らかとなった。その論証は申請者の「奈良絵本『うつほ物語』の背景」（『文学』岩波書店、2008 年 7・8 月）に発表している。ただ、それはあくまでも『うつほ物語』という一作品における知見である。本研究では作品を限定せず、「板本に基づいて製作された奈良絵本」という枠組みを設定し、「板本→奈良絵本」という製作過程が奈良絵本全体においてどのくらい認められるのかを明らかにしてゆく。

２．研究の目的

奈良絵本と板本の関係は、一般に奈良絵本に基づいて板本が製作されたと考えられることが多い。しかし、先に申請者は『うつほ物語』の奈良絵本においては通説とは逆に板本に基づいて製作されていることを明らかにした。それはあくまで一作品における考察結果であったが、この「板本→奈良絵本」という製作順序は奈良絵本全体においてどのくらい認められるかを『竹取物語』や『伊勢物語』などの奈良絵本を手がかりに明らかにしてゆく。出版されて広く流布した本を基に豪華な奈良絵本を仕立てる営みから奈良絵本の果たした役割を探り、製作者がどのような意図と方法でどの板本を模倣し、どういった面で独創性を発揮したのかを検証する。

本研究の特色としてまず挙げられるのは、写本と板本の関連に言及する研究書にしばしば見られる、「板本に近い」あるいは「板本系」といった表現を極力用いないということである。奈良絵本にかぎらず、写本の本文について言及する場合、「○○年刊の板本に近い」、「板本系の本文によったのであろう」ということがよく言われる。しかし、この表現では本研究の目的を果たすことは難しい。なぜなら、板本に近いということと、板本に基づいて製作したということは別の事態を意味するからである。「板本に近い」、「板本系」というだけであれば、板本の基となった写本という意味合いも含まれ、成立順序を考察することはできない。本研究では奈良絵本と板本とを詳細に比較・検討することによって、「板本に基づいて製作された」と確定し得るよう努めたい。実際に、両者の異同は詳細に検討すれば誤写であったり誤脱である場合が多く、たとえば九州大学附属図書館所蔵の『うつほ物語絵巻』に見られる誤写は、明らかに元の板本（万治三年刊本）を写し誤ったと説明できるものばかりなのである。『竹取物語』や『伊勢物語』、『源氏物語』などの作品についてもこのような観点に立って検証したい。

それから、「奈良絵本の役割」、「板本の役割」という視点を重視するのも本研究の特色である。中野三敏「和本には身分がある」（『図書』岩波書店、平成 20 年 8 月）にも当時の「写本を主とし、板本を従とする評価」が指摘されているが、すでに板本が流布している状況であえて奈良絵本を作る必要性はどこにあったのか。それはひとえに奈良絵本の特質による。すなわち、奈良絵本は他の文字ばかりの写本とは異なり、極彩色の絵を伴う一個の美術品でもある。文字情報のみを伝えるものではないのである。そのため、奈良絵本の多くは金箔や金襴緞子を用いた豪華な作りであり、大名家の嫁入道具などに用いられたと考えられる。板本としていったん出版された本が、今度はその本文と挿絵に基づいて豪華な奈良絵本に仕立て直されるという現象は文化の創出・継承という観点からも大変興味深いのである。

これまでの研究は、手で写しながら製作する奈良絵本から大量印刷が可能な板本への道筋が描かれていた。その際には、公家や大名家だけのものが庶民へと行き渡ったとい

う説明もしばしば添えられた。たしかにそういった側面があることは否定できない。ただし、大量印刷による板本の普及が奈良絵本を不要なものへと追い込むことは決してなかった。板本が普及してもなお、奈良絵本には奈良絵本の役割があったのである。それゆえにこそ、板本→奈良絵本という枠組みもあり得た。奈良絵本の役割という視点からも、板本との影響関係を考察してゆく。

３．研究の方法

（１）奈良絵本のデータの収集（平成 24～26 年度、特に初年度の 24 年度）
所蔵機関での閲覧・撮影による調査、複製本やマイクロフィルム複写の収集を進める。特に、九州大学附属図書館所蔵の新出奈良絵本に注目する。
（２）奈良絵本の本文と挿絵をそれぞれ板本と詳細に比較調査（平成 24～25 年度）
作品ごとにそれぞれどの板本に基づいて製作されたのかを確定してゆく。この作業は従来の研究では十分になされていない。その上で、誤写・誤脱の調査から成立順序を明確にする。
（３）挿絵の検討と研究成果の集成（平成 26 年度）
板本に基づいて製作された奈良絵本は、挿絵部分において絵師の独自色を発揮する例がある。それを検討した上で、3 年間の研究成果を集成する。

４．研究成果

平成 24 年度は、『伊勢物語』、『源氏物語』、『竹取物語』の奈良絵本・絵巻や板本について、各地の図書館等に所蔵される諸本の複写依頼やデジタル資料を蒐集し、その絵と本文を調査した。『伊勢物語』については、本研究課題の大前提となる「板本から奈良絵本・絵巻へ」という製作の過程を九州大学附属図書館蔵本や広島大学附属図書館蔵本・國學院大學図書館蔵本など複数の奈良絵本・絵巻において確認した上で、初段を描いた挿絵（二図）を取り上げて季節の問題を検討した。

初段の挿絵では製作された時代が下るにつれ、第一図の季節が春から秋へと変化し（それは画面に描かれるのが梅から紅葉に変わっていることから確認できる）、第二図の花が梅から桜へと変わっている。その変遷を嵯峨本に始まる各種板本と、板本に基づいて製作された奈良絵本・絵巻について詳細に調査した。そこには後代の絵師達のそれぞれの工夫の跡が見られる。この成果については翌 25 年度に学会において口頭発表した（後述）。また、奈良絵本・絵巻に描かれた「藤棚」を手がかりに、藤の花の描き方が場面や製作年代によって異なることを明らかにし、これについても、２月に行った若手研究者の研究会において口頭で発表した。

平成 25 年度は前年度の研究成果を受けて、『伊勢物語』、『竹取物語』、『源氏物語』の奈良絵本と板本の関係について考察した。『伊勢物語』の初段における挿絵二図については、そこに描かれた紅葉・桜にそれぞれ着目すべきことを昨年度指摘し、初段の絵を二段の絵と誤解するに至る経緯を考察したが、今年度はより多くの絵入板本を参照した上で、その研究成果を 6 月の九州大学国語国文学会において口頭発表した。さらに、11 月には『超域文化科学紀要』に論文「『伊勢物語』初段挿絵考」を発表した。

『竹取物語』については東京大学文学部国文学研究室所蔵の『竹取物語絵巻』の調査を進め、その本文の系統や挿絵の特徴について考察した。本文と絵がちぐはぐな場面が見られることも確認され、本文と絵とが独立して製作される様がうかがわれた。『源氏物語』については藤の花の描き方について、絵の場面によって藤棚の有無が異なることをさまざまな源氏絵に即して確かめた。

本研究課題の最終年度となる平成 26 年度は、研究期間の三年間に主に調査対象とした『伊勢物語』、『竹取物語』、『源氏物語』について、奈良絵本と板本との関係を整理しつつ、それぞれの本文を検討する過程で気がついた問題に取り組み、論文や学会発表の形で成果を発表した。

特に『源氏物語』の本文については、室町期から江戸期にかけての諸本を通覧した上で、伝肖柏筆本、書陵部本、三条西家本、嵯峨本、『絵入源氏』などの相互の関連を調査し、奈良絵本の時代に用いられた本文の生成過程を考えた。その成果の一端は 6 月の中古文学会のシンポジウムにおいて「青表紙本の系譜」として口頭発表し、11 月にはその内容を『中古文学』誌に論文として発表した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　７件）

菅原克也、<u>田村隆</u>、松尾梨沙、刀根直樹、早川萌、高原智史、吉岡悠平、〈座談会〉手紙が伝えるもの、比較文学・文化論集、32 号、査読無、2015、pp.37-58

<u>田村隆</u>、青表紙本の系譜、中古文学、94 号、査読有、2014、pp.14-20

<u>田村隆</u>、卑下の叙法、国語と国文学、91-11 号、査読有、2014、pp.28-38

<u>田村隆</u>、桐壺巻の練習問題、ニューサポート高校国語、20 号、査読無、2013、pp.8-9

田村隆、『伊勢物語』初段挿絵考、超域文化科学紀要、18 号、査読無、2013、pp.253-264

田村隆、「御返りなし」考、むらさき、49 号、査読有、2012、pp.18-27

田村隆、久保猪之吉の旧蔵書、九州大学附属図書館研究開発室年報 2011-2012、査読無、2012、pp.32-33

〔学会発表〕（計　２件）
田村隆、青表紙本の系譜（シンポジウム報告）、中古文学会、立教大学新座キャンパス（埼玉県新座市）、2014 年 6 月 7 日

田村隆、『伊勢物語』初段挿絵考、九州大学国語国文学会、九州大学附属図書館視聴覚ホール（福岡県福岡市）、2013 年 6 月 8 日

〔図書〕（計　０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
田村　隆（TAMURA Takashi）
東京大学・大学院総合文化研究科・講師
研究者番号：70432896

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：